

平成十六年も年末を向かえ、後残りわずかとなりました。今年は本当に暖冬でしたが、十二月も末ともなるとさすがに朝晩冷え込んでまいりました。皆様新年をまじかにいかがお過ごしでしょうか。

当院も開院以来一年半が過ぎ、病院としてはやっと幼児期を迎えた頃でしょうか。職員皆、元氣を出して患者さんのために一生懸命、昼夜を問わず走り回っております。一般的に病院は二十年位すると成熟期をむかえ、いろいろ安定化しますが、その頃にはどうしても初心を忘れがちになり、病院の設立の目的どころか、誰のために医療を行っているのかわからなくなる職員もでてきます。そうすると苦しがつている患者さんに辛く当たったり、平気で待たせたりする者も出てきます。そうすると病院の設立の意味どころか、存続の必要性を考えたほうがよい状況です。ぜひ我々の福岡新水巻病院はいつまでもいつまでも「初心を忘れず、ただ患者さんのために」どうすればよいか自問を常に行い、自省を忘れず、謙虚な気持ちで患者さんに優しく接したいものです。宜しく願います。

平成十七年度より当院は臨床研修医指導病院として新たに六人の新人医師が仲間に加わります。世の中には新人が来るとレベルが下がるし、事故が起こるから止めとけ、という風潮があり、大学病院でも平気でそう言うてはばからない所もあります。私から言わせるとその指導者は何を考えているんだ！というところですよ。新人に何をさせて何をさせたらだめかわかってないのでしょうか。そういう私もわずか二十年ちよつと前には新人でした。先輩医師は微笑みながらがんがん何でも教えて、何でもさせてくれました。そういう徒弟制度の中から医師は技術を学び、ある部分は盗み、それを発展させて自分のものとし、そこから良医が生まれてきます。新人を育てる器量があつてこそその先輩医師も一人前と言えると考えます。自分は教わりたいけど後輩に何で教えてやらないといけなの？こんな先輩医師は福岡新水巻病院はおりません。みんな教え上手です。良医です。当院は考え方が違います。患者さんのためには自分たちの手で常識ある良医を育てるのです。その弟子たちは二十年後の医療を、また福岡新水巻病院を発展させてくれることでしょう。

先日ある首長さんとお酒を飲みながらいろいろ話しました。この地区に病院を作ってくれて本当に嬉しいと言われました。これを永遠に普遍性をもって存続することこそ我々の仕事だと深く考えました。

第20章。

